

J.LEAGUE NEWS

Vol. 141

26.Oct.2007



J.LEAGUE

編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想



© J.LEAGUE PHOTOS

「Jリーグの目指すもの」というテーマで基調講演を行った鬼武チェアマン

Will Be
J.LEAGUE

「Jリーグセミナー」を開催

Jリーグ準加盟を目指すクラブのより良い準備のために

Jリーグは9月29～30日の2日間にわたり、JFAハウスにおいてJリーグ準加盟を目指すクラブ向け「Jリーグセミナー」を開催した。このセミナーは、日本サッカー協会とJリーグが2006年3月から募集を開始した「Jリーグ準加盟クラブ」への申請を予定しているクラブ関係者を対象に、ホームタウンのあり方や事業関連などの情報をJリーグから提供し、「学習」と「情報交換」を目的としながら、より良い準備をしてもらうために企画したもの。Jリーグの鬼武健二チェアマンの基調講演に始まり、特別講演、グループディスカッションやパネルディスカッションなどが行われた（2ページに関連記事）。

オフィシャルスポンサー

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

KONAMI

AiDEM

HEIWA

GE Money

ネットワークパートナー

NTT
東日本 NTT
西日本

Jリーグ百年構想パートナー

朝日新聞

リーグカップスポンサー

ヤマザキナビスコ

エクイップメントサプライヤー

molten

準加盟

Jリーグ準加盟を目指すクラブ向け「Jリーグセミナー」

講演とディスカッションでJリーグへの理解を深めた有意義な2日間

Jリーグ準加盟を目指すクラブの関係者など、37名の参加者を集めて開催された「Jリーグセミナー」は9月29日、Jリーグの鬼武健二チェアマンによる基調講演で始まった。

鬼武チェアマンは「Jリーグの目指すもの」と題した講演の中で、「地域の人々にとってなくてはならない、生活の一部であるような」総合スポーツクラブづくりという、Jリーグ百年構想の理念を解説した。Jリーグの年間総入場者数を2010年までに1100万人にしようというイレブンミリオンプロジェクトも、「ただ数字を追いかけているだけではない。これまでのホームタウン活動、スポーツ振興、社会貢献活動などを、さらに積み上げることが実現に近づく」と、Jリーグ百年構想と不可分のものであることを強調した。そして、理想を実現するために「じっくりと基礎を固めることが大切。勇気と情熱を持って取り組んでほしい」と参加者に訴えた。

続いて、Jリーグで31番目のクラブとなった愛媛FCの佐伯真道 取締役GMが、「愛媛FC Jリーグまでの道のり」と題した特別講演を行った。クラブの立ち上げから、2003年のJリーグ加盟申請見送りなど、さまざまな試練を克服してJリーグ入会に至った歩みを振り返った話は、実体験に基づく興味深いもの。地域リーグからJリーグへ昇格する際のポイントとして、「人、資金、強化」の重要性を述べ、「皆さんにも、この感動を味わってほしい」と結んだ。

その後はグループディスカッション、さらに日本政策投資銀行地域振興部審議役でJリーグ理事の傍士銑太氏、佐伯GM、Jリーグの佐々木一樹常務理事をパネリストに迎えた



グループディスカッションで意見を交換する参加者

パネルディスカッションが行われた。

翌30日には、傍士氏による「クラブと地域社会」をテーマとした特別講演を実施し、国内外と古今の豊富な事例、資料を基に、地域密着の重要性が分かりやすく解説された。地域の自立という観点からも「地域のスポーツが、そこに住む人々の意識を変える。Jクラブのホームタウンでは、地域意識が非常に高くなっている。人々が誇りを持ち、楽しんだり、喜んだりできるものを増やせたら」と話した。

初日のスケジュール終了後には懇親会も開かれ、セミナーに参加した北信越リーグのツエーゲン金沢の関係者は「交流によって他クラブの抱えるさまざまな課題も知ることができ、非常に有意義だった。地域の理解を得るためには、サッカーだけでなく、広い視野を持つことの大切さを学ぶことができた」と感想を述べた。



パネリストの傍士氏、佐々木常務理事、佐伯GM (左から)

Jリーグ準加盟制度

Jリーグは、J2リーグへの入会を目指し、一定の基準を満たしたクラブを「Jリーグ準加盟クラブ」として認定している。日本フットボールリーグ(JFL)所属クラブだけでなく、地域リーグ、都道府県リーグの所属クラブも対象となる。J2入会にはJFL所属の「準加盟クラブ」であることが必要。日本サッカー協会(JFA)とJリーグは「アドバイザーチーム」を設置し、準加盟クラブがJ2入会基準を満たせるよう、さまざまなサポートを行っている。JFAとJリーグは準加盟クラブの申請を随時受け付け、年4回の審査機会を設けている。

地域密着

「第8回 全国ホームタウンサミット in 柏」開催

チームボランティアの有意義な意見交換、ネットワークづくりの場



全体会であいさつする柏の本多晃後援会会長(柏市長)。写真提供：柏レイソル

柏レイソルのホームタウン、柏市において「第8回 全国ホームタウンサミット in 柏」(主催：2007柏ホームタウンサミット実行委員会)が10月13日、全国のJクラブのボランティアを集めて開催された。1999年にスポーツによる地域振興などを市民レベルで考えていくことを目的に平塚市で第1回が開かれ、これまで新潟市、仙台市、川崎市などで開催されてきた。Jクラブのホームタウンを盛り上げようと活動している団体、個人など、幅広

い参加者が集う場となっている。

柏市民文化会館小ホールで行われた全体会ではJリーグの小竹伸幸理事が「Jリーグの過去、現在、未来」と題する基調講演を実施した。その後、参加したボランティアたちは5つの会場に分かれた分科会に出席し、各チームの実情や課題などについて積極的に意見や情報を交換。ペガルタ仙台が取り組んでいる割りばしの別個収集といった、ごみの分別の細分化などが参加者の注目を集めていた。

2007 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

大会

決勝のカードが決定。初優勝を目指す川崎FとG大阪が対戦

準決勝第2戦はゴールの応酬。攻撃的なチーム同士の決勝に大きな期待



© J.LEAGUE PHOTOS

準決勝第2戦、川崎Fの中村(右)と横浜FMの山瀬功(左)。右の写真は同じく、伊藤(2番)の同点ゴールを祝福する川崎Fの選手たち



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

2007 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝のカードが、ともに初優勝を目指す川崎フロンターレとガンバ大阪の対戦に決まった。

川崎Fは準決勝で横浜F・マリノスと対戦し、アウェイの第1戦に2-1、ホームの第2戦に4-2と連勝し、準優勝した2000年以来、2度目の決勝進出。G大阪は鹿島アントラーズにホームで1-0、アウェイで2-3と1勝

1敗、2試合合計得点も3-3となったが、アウェイの得点で上回り、やはり準優勝だった2005年以来、2度目の決勝に駒を進めた。

川崎Fの関塚隆監督が「(決勝の行われる)国立競技場ではわれわれらしい戦いをしたい」と抱負を述べれば、G大阪の西野朗監督は「(決勝で敗れた2年前の)あの悔しさは全員に残っている」とモチベーションの高さを強調。攻撃的なサッカーを持ち味とするチームの対戦は、手に汗握るスリリングな攻防が期待できる。

また、予選リーグから全会場で行われ、小学生以下の子供たちを対象にした



© J.LEAGUE PHOTOS

準決勝第2戦、G大阪の播戸(左)と鹿島の岩政。上の写真は同じく、シジクレイ(左から3人目)の貴重なアウェイゴールを喜ぶG大阪の選手たち

スペシャルイベント「ナビスコキッズイレブンクラブ」といっしょにファイナルを目指そう!!」は、準決勝第2戦までに1万6787人(1会場平均279.8人)が参加。決勝当日には川崎F、G大阪の予選リーグから準決勝までの各試合会場イベントに参加した子供たちの中から抽選で各11名を招待し、国立競技場のピッチにおいてシュートゲームとドリブルゲームなどで対戦する「ナビスコキッズバトル」が開催される。

【決勝 川崎フロンターレv.ガンバ大阪】



※表の右側のチームが第1戦のホームチーム、左側のチームが第2戦のホームチーム
※決勝は表の左側のチームをホームチーム扱いとする

【決勝の試合方式および勝敗の決定】

90分間(前後半各45分)の試合を行い、勝敗が決しない場合は30分(前後半各15分)の延長戦を行う。それでも勝敗が決しない場合はPK方式によって決定する。

【表彰】

優勝：賞金1億円、Jリーグカップ、ヤマザキナビスコ杯、メダル
2位：賞金5000万円、盾、メダル
3位：1クラブにつき賞金2000万円、盾

【TV放送】

フジテレビ系列にて全国生放送、CSフジテレビ739にて全放送、BSフジにて全放送

大会

AFCチャンピオンズリーグ2007。浦和が4強入り

アジアの強豪との戦いを通して得た国際経験は、日本サッカーの財産に

アジア地域のクラブ王者を決めるAFCチャンピオンズリーグ(ACL)2007において、浦和レッズが準決勝進出を果たした。ACLが現行方式となって以来、日本のチームとしては最高の成績を収めている。川崎フロンターレとともにグループステージを勝ち抜いた浦和は、準々決勝で全北現代(韓国)にホームで2-1、アウェイで2-0と連勝。準決勝で

は昨年の覇者、城南一和(韓国)と決勝進出をかけて戦った。

リーグ戦の合間を縫い、異なる環境下での試合によって得た経験、ノウハウは出場チームだけでなく、日本サッカー界にとっても貴重な財産となるだろう。なお、川崎Fは準々決勝でセパハン(イラン)と2試合とも0-0と引き分けた後、PK方式により4-5と惜敗した。



© J.LEAGUE PHOTOS

準決勝第1戦、浦和は城南一和とアウェイで2-2の引き分け

イレブン
ミリオン

「イレブンミリオン」公式マークを公募

採用者にはイレブンミリオン公式マーク入りのオリジナル・シャーレを贈呈



募集要項

【募集期間】2007年10月8日～11月30日(当日消印有効)
【応募方法】①郵便ハガキもしくは同等サイズの用紙(100mm×148mm)に、あなたがイメージする「イレブンミリオン」のマークを描いてください。②ハガキの裏には、あなたの名前・住所・年齢・性別・電話番号を記入してご応募ください。③1枚の用紙にデザインは一点とします。あひとりで複数でもデザインをご応募いただけます。④1枚の用紙に2つ以上のデザインを描かれます。⑤当選には必ず入りますので、ご応募ください。⑥応募された作品は必ずお返しします。
【対象】①10歳～20歳 東京都港区六本木 六本木新劇場前庭の「Jリーグ(イレブンミリオン)」係
【審査・発表】2008年シーズン開幕前(予定)
【その他】採用された方には、イレブンミリオン公式マーク入りのオリジナル・シャーレ(銀皿)を贈呈いたします。応募された作品は必ずお返しします。そのほか、採用された方には、記念品をお返しします。
【お問い合わせ】Jリーグ事務局(03-5561-0002) 東京都港区六本木 六本木新劇場前庭の「Jリーグ(イレブンミリオン)」係
【応募用紙】Jリーグ公式サイト <http://www.j-league.or.jp>

Jリーグは2007年11月30日まで、「イレブンミリオン」公式マークの公募を行っている。プロ、アマチュアを問わず応募が可能で、採用されたデザインの作者に対しては、お好きなJリーグのクラブから、イレブンミリオン公式マーク入りのオリジナル・シャーレ(銀皿)を贈呈。そのほかの優秀作品には、記念品が贈られる。

イレブンミリオンは、多くの人々がJリーグの原点である「スタジアム」で感動を分

かち合うため、2010年までにJリーグの公式試合における年間総入場者を1100万(イレブンミリオン)人にするをを目指す取り組み。採用された公式マークは、Jリーグ、Jクラブがイレブンミリオンプロジェクトとして活動する際に使用される予定だ。

Jリーグ公式ホームページからも応募が可能となっており、詳細については(<http://www.j-league.or.jp/release/000/00002024.html>)を参照。



原点は人々の集うスタジアム(2007 J1リーグ戦第9節、甲府対横浜F.C.、山梨県小瀬スポーツ公園陸上競技場)

イベント キッズニア東京1周年記念企画「スポーツウィーク2007」に協力

スポーツに関連するさまざまな職業を体験した子供たち

Jリーグは、プロ野球12球団など他のスポーツ団体とともに、キッズニア東京(KidZania Tokyo)1周年記念企画「スポーツウィーク2007」(10月15～19日)への協力を行った。キッズニア東京は、子供たちが好きな仕事に取り組み、楽しみながら社会の仕組みを学べる「こどもが主役のこどもの街」。今年10月5日に、オープンから1周年を迎えた。

「スポーツウィーク2007」は、子供たちがプロスポーツの世界をリアルに体験できる職業体験イベント。サッカー選手にチャレンジした子供たちは、Jクラブのユニフォームに身を包み、あこがれのプロ選手になりきってボールをけた。

また、15日の「スポーツウィーク2007記念セレモニー」、15、16日のデモンストレーションには、Jリーグ百年構想メッセンジャーの城彰二氏も登場した。



Jクラブのユニフォームを着て、プロサッカー選手気分の子供たち

「鬼武チェアマン 10月」若い経済人との交流を通し、Jリーグの理念を伝える



平塚市では「企業とスポーツ」をテーマに講演

10月6日、平塚市民センターにおいて関東8県、78市の商工会議所青年部のメンバーが集う第27回関東ブロック大会第一分科会に出席した。分科会では「企業とスポーツ」をテーマに、地域社会に対するJクラブの貢献や、地域企業とJクラブの互恵関係づくりについて意見交換を行った。スポーツクラブを通じて地域の自立と振興を図るJリーグの理念を、地域を担う若い経済人たちに伝える、いい機会となった。

また、同10日には仙台で開催されたJ1・J2合同実行委員会に出席した。委員会には、プロ野球パ・リーグの東北楽天ゴールデンイーグルスから池田敦司取締役を招き、楽天におけるファンサービスや顧客マーケティングへの取り組みについて話を伺った。

翌11日には、東北地域のメディアを対象にしたチェアマン懇親会を開催し、ベガルタ仙台、モンテディオ山形とともに、地元メディアとの親睦を図った。

「個の育成」における指導者の重要性

JリーグHRディベロップメントグループ マネージャー 山下 則之

今年8～9月に実施された第6回Jリーグ・アカデミー海外研修2007の概略は、すでに前号でお伝えした。今号ではその続編として、FIFA U-17ワールドカップ 韓国2007を視察しての印象や、そこから感じた日本における今後の選手育成などの課題について報告する。

要となる。コーチたちはクラブ内だけでなく、巡回指導を通して地域ともコミュニケーションを図る以上、世界の傾向、われわれの課題をきちんと伝えることが、全体のレベルアップに結びつくと思う。

「世界に、日本は変わったと言わせたい」。そういった気概と意欲にあふれた指導者を望みたい。世界のサッカーは刻々と進歩している。指導者自身が考え、子供たちに考

の整備も大切なテーマだ。

国内においては年齢別のリーグ戦を当然のこととして、ホームとアウェイの試合を選手たちに実感させたい。また、その感じ方も選手によって異なるだけに、その点は監督やコーチの指導によって、うまく導かなければならない。試合から分析して子供たちに伝えることでも、指導者の能力が問われるだろう。

もう一つは、国際経験を増やすことだ。それによって日常の活動が過密になってもいいが、年齢に応じて、どこで、何を体験させるか、しっかりと計画を立てる必要がある。日本の若い選手の国際経験も豊富になったが、例えばアフリカ勢との試合経験はまだ少ない。情報としては知っていても、ピッチ上の実体験とは異なる。これは選手自身が経験しなければならないが、彼らを率いる指導者たちにとっての勉強にもなる。

多くの人々がかかわる育成

研修から帰国後の9月18日には、参加者が再び集まり、成果の検討や今後の方針について意見が交わされ、子供たちとともに育てることの大切さを再確認した。FIFA U-17ワールドカップ 韓国2007では、ボールを奪われたら奪い返すといったアグレッシブなプレーは見られたが、ユニフォームを引っ張るなどの非紳士的な行為は少なかった。指導者も審判員も、子供たちにフェアプレーの大切さを教えないといけない。この大会では審判の技術も高く、この年代を育成するには指導者以外にも、審判の役割の大切さを再認識した。

育成には多くの人々がかかわり、クラブで、地域で子供を育てることが必要だろう。韓国の釜山で訪問したクラブでは、大人たちが若い選手たちと頻りに会話を交わしており、一種のファミリーのような雰囲気がうかがえた。そうした関係が構築されれば、選手がクラブを離れざるを得ないような場合でも、絆は維持され、その後も支援者、理解者としてクラブを支えてくれるのではないだろうか。

参加者は約2週間の研修によって、大いに刺激を受けたようだ。今後は、参加者間の連携を密にしながら、子供たちの一人ひとりに向き合い、その成果を生かしてほしい。



©J.LEAGUE PHOTOS

FIFA U-17ワールドカップ 韓国2007のグループステージ、日本対ナイジェリア戦

世界レベルの質の高さ

これまでのJリーグ・アカデミー海外研修は、育成システムの仕組みを視察することが中心だったが、今回は方向性を変えてみた。お隣の韓国でFIFA U-17ワールドカップという世界レベルの大会が開かれていたこともあり、「個の育成」という観点から、このレベルで戦うために必要なものを2～3年後を見据え、U-13～15年代の指導者に考えてほしかったからだ。

優勝したナイジェリアをはじめ、4強に入ったチームの選手たちは、高い技術を備えていた。プレッシャーの下、あるいは雨で濡れたスリッピーなピッチで、きちんとボールをコントロールし、けることができていた。ボールを取られたら取り返すといった当たり前のこと、状況に応じた11人の連動などは、2006 FIFAワールドカップ ドイツをほうふつとさせる場面もあった。もちろん、単純なミスや判断の誤りも見受けられたが、仲間同士で声を掛け合い補っていた。

個の育成の中で、技術を伸ばすことはもちろんだが、質を追求しないことには、レベルの高い世界で戦えないことを、参加者一同は再認識した。

個の育成には当然、指導者の果たす役割が重要になってくる。サッカーの技術を教えるだけでなく、内外の豊富な情報に接し、整理して子供たちへ適切に伝達していく能力も必

えさせるような環境をつくり、世界基準で考えなければならない。

優秀なコーチを一人でも多く養成するため、Jリーグ・アカデミーは海外研修、選手一環教育 指導者研修会、あるいは外国人指導者によるワークショップなどを実施しており、ぜひそういった機会を利用していきたい。

普及活動と試合環境の整備

普及活動も大切だが、裾野を広げつつ、底辺のレベルを上げていくことも必要だろう。ボールに親しむ子供たちの数を増やしなが、才能を秘めた子供たちが一人でも多く、サッカーへの関心を持続することを期待したい。

底辺が拡大し、そのレベルが上れば、さまざまな個性を備えた子供たちが現れてくると思う。彼らがその個性を伸ばしていけば、監督やコーチの選手選考における選択肢が増える。例えば、監督が代わり、そのコンセプトが変わっても、対応が可能となるだろう。

その意味では、幼稚園や小学校への巡回指導、補欠をつくらないリーグ戦など、Jリーグ・アカデミーの活動はとても重要だ。その意識を高めなければいけない。そうして得た知識や情報を、Jクラブはどんどん地域に発信してほしい。そしてJリーグ全体が認識を共有し、年間の育成サイクルなどを考えなくてはならない。

また、国内外における試合経験、試合環境